

『今月の天候と農作業』

通巻第5696号

2月号

令和7年1月30日発行

宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は、気温がかなり低くなる見込みです。

【予報のポイント】

向こう1か月の気温は、寒気の影響を受けやすい時期があるため、低いでしょう。特に、期間の前半は、気温がかなり低くなる見込みです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	50	30	20
降水量	九州南部	40	30	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天候は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、低い確率50%で低い見込みです。降水量は、ほぼ平年並の見込みです。

<1 週目の予報> 2月1日(土)～ 2月7日(金)

低気圧の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<2 週目の予報> 2月8日(土)～ 2月14日(金)

冬型の気圧配置の影響で、太平洋側を中心に平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 2月15日(土)～ 2月28日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆早期水稻

1 スクミリングガイ対策

スクミリングガイ（ジャンボタニシ）対策では、厳寒期の耕うんが効果的です。発生ほ場では、トラクターの走行速度を遅くし、ロータリーの回転数を上げると、殺貝効果が高まります。

2 播種と出芽

浸種は発芽揃いを良くするために水温が10℃の場合は10日間、15℃の場合は7日間程度を目安に行います。水温10℃以下の低温を避け、夜間の冷え込みにも注意しましょう。浸種後に、30℃～32℃で24時間の催芽を行います。

播種量の目安は、稚苗では1箱当たり催芽粃180g程度です。

3 緑化と硬化

出芽後は、1葉目の本葉が展開し、2葉目が抽だいするころまで寒冷紗等で遮光します。昼間が25℃以下、夜間が15℃以上の温度で管理しましょう。

硬化時の温度管理は、昼間が20℃以下、夜間が10℃以上とし、後半は外気に慣らします。かん水は床土の温度を下げないように午前中に行いましょう。

◆ムギ類

1 穂肥

月末には幼穂形成期を迎えます。小麦では2月中旬に10a当たり窒素成分で2・5kg、加里で2kg程度を施肥します。

2 土入れと排水対策

土入れは肥料の流亡防止、雑草抑制や防寒効果があるため、節間伸長期前までに行います。排水対策として、ほ場の周囲や条間を作溝します。

(福川 泰陽)

施設野菜

◆共通事項

日中の温度の確保と、内幌カーテンの開閉により日射量を確保し光合成を促進します。また、午前中の内幌カーテンの開閉は、ハウス上部の空気が十分に暖まってから数回に分けて行います。同時に、植物への結露が多い場合は、病気の発生を防ぐため

に、早朝の加温や谷換気の開閉幅などの設定を見直します。

また、日射量が徐々に多くなり、葉からの蒸散量が増えるため、灌水不足に注意しましょう。

◆きゅうり

促成のつる下ろし栽培では、「芯止まり」になりやすいため、開花節位は生長点から3～4節目を目標とし、開花節位が上がった場合には強めの摘果を行うとともに夜間の設定温度を上げて、草勢維持に努めます。

◆ピーマン

受光態勢をよくするため、下位節の徒長枝を摘除するとともに、中位節以下の側枝は2～3節で摘心し、下位節まで光が当たるようにします。開花節位が上がった場合は、こまめな収穫を行うことで着果負担を抑えます。

◆トマト

果実肥大、着色促進及び食味向上のために、日射量と1株当たり15～18枚の葉数を確保します。また、早朝の結露で裂果が発生しないように、早朝の加温や換気による除湿を行います。

◆いちご

曇天が続く場合は、果実の成熟に必要な温度が確保できず、成熟期間が長くなり、裂果等の品質低下と着色不良となりやすいので夜温をやや高めにして管理します。また、大玉果や食味向上のため裾玉を摘果します。今後、ハダニが増加しやすい時期になるため、古葉や収穫の終わった果梗はこまめに除去し、定期的に薬剤散布を行います。

(境田 耕作)

葉茎根菜類・いも類

◆共通事項

播種や定植を行う品目では、発芽や活着を促すために、適切な土壌水分の確保が重要です。土壌が乾燥している場合は、スプリンクラーなどにより、かん水をしましょう。

◆食用かんしょ

トンネル栽培の定植時期です。苗の徒長を防ぐために、採苗の10日前頃から、苗を外気温に当てて管理しましょう。

サツマイモ基腐病を育苗ほ場から栽培ほ場に持ち込まないことが重要です。育苗ほ場では、発病株を見つけたら速やかに抜根処分をします。また、苗を切り取る高さは地際から5 cm以上離し、切り取った苗は薬剤で消毒します。なお、薬液は処理当日に調整したものを使用しましょう。

苗は採苗後すぐに定植するよりも、数日間取り置きすると定植後の活着が良くなります。また、地温（18℃以上）を確保するため、定植の前日からトンネルを密閉しましょう。

◆さといも

早生品種の定植時期です。連作障害を回避するために、さといもを4年以上栽培していないほ場を選びましょう。

種いもは、病虫害や芽つぶれ等が無く、30～50 g程度のものを使用しましょう。また、センチュウや乾腐病に効果のある薬剤で消毒しましょう。

◆ほうれんそう

露地栽培では、気温の変化や降雨により、生育障害（茎折れや葉の白化・黄化等）が発生しやすくなります。また、気温の上昇と降雨により病虫害の発生が増加するため、適期に防除を行いましょう。

（中村 剛）

果樹

Ⅰ 常緑果樹

◆完熟きんかん

出荷の最盛期を迎えます。厳寒期を過ぎると気温が徐々に上がり、過熟やうるみ果の発生が懸念されます。ハウス内の温度は昼間は10～15℃を保ち、夜間は凍害に遭わないように管理します。完熟果実は衝撃に弱いので、過度の積み重ねを避けるなど、丁寧な収穫・出荷作業を徹底しましょう。

◆マンゴー

早期出荷の作型では、摘果の時期です。開花期の遅れやばらつきにより、例年より生育が遅れている園地が散見されますが、果実の縦長が5 cm程度になったら、最終的に結果枝2～3本に対して1果となるように摘果します。また、厳寒期を過ぎると、夜間の外気温が徐々に上がるため、あざ果症の発生に注意が必要です。早朝や日の出後に果実に結露が生じないように、ヒートポンプの除湿設定やこまめな早朝の換気により湿度を低く保ちましょう。

後期出荷の作型では開花期を迎えます。夜間の十分な加温や早朝の換気を行うこと

で湿度を低く保ち、軸腐病などの発生をしっかりと抑えます。花穂をひもでつり上げ、風通しを良くすることも重要なポイントです。灰色かび病に対する微生物殺菌剤の活用も有効です。

2 果樹全般

◆有機質の投入と土壌改良

高品質・高収量を実現するためには、土壌の通気性の確保が重要です。完熟たい肥や稲ワラなどの有機物を施用し、土壌の通気性の改善を行います。

土壌の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害して、樹勢低下を招きます。土壌分析を行い、必要に応じて石灰質資材で調整します。

(黒木 宏憲)

花き

◆電照ギク

2、3月出荷の作型は最も暖房コストがかかるため、それぞれの品種・系統に適した夜間の変温管理を行い、コスト削減に努めます。

また、ハウス内の湿度が高くなると白さび病が発生しやすくなるため、換気による除湿や循環扇の活用、農薬の予防散布などの対策を行います。

◆スイートピー

日長が長くなるにつれ、蒸散量や養分要求量が増加します。かん水及び施肥を適切に行い、草勢低下を防ぎましょう。

また、花シミの発生が増える時期になります。花シミの発生要因は大半が水滴の付着であるため、循環扇の活用や換気による除湿等を行い、結露防止に努めます。

◆ホオズキ

地下茎の植え付け開始時期です。

病虫害をほ場に持ち込まないために、健全な地下茎の選別・調整をしっかりと行います。また、必要に応じて植え付け前に地下茎の消毒を行います。

◆トルコギキョウ

天候不順時には、ブラスチングやチップバーンが発生しやすくなります。

生育後半の過剰施肥を控えるとともに、不要な枝や蕾の整理、カルシウム剤の葉面散布等により発生の軽減を図ります。

◆ラナンキュラス

収穫量の増加に伴う草勢低下を防止するため、液肥を定期的に施用します。

また、ハウス内の温度が低すぎると、光合成が低下し、収量に影響するため、日中の温度を15℃程度を目安に管理します。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

2025年1月29日現在、全国14道県において本県の2例を含む47例の高病原性鳥インフルエンザが発生しています。また、飛来する野鳥や環境試料(水)からもウイルスが確認されています。野鳥が営巣地に帰る4、5月までは、農場への侵入リスクが特に高い状況が続くため、防鳥ネットの点検を強化し、破れがあれば速やかに補修をしてください。

その他の家畜伝染病についても、ウイルスが伝染しやすい気象条件にあるため、農場にウイルスを侵入させないよう、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策を徹底し、飼養衛生管理基準を遵守しましょう。

◆家畜

先月同様、寒さが厳しく、乾燥する時期になります。

特に、幼畜は、寒さや温度変化に弱いため、防寒対策を行きましょう。

乾燥により埃や塵が舞いやすくなるため、呼吸器病対策のために、細霧器等を使用して湿度を適度に保ち、畜舎内が乾燥しすぎないように留意しましょう。また、畜舎内の温度維持のためカーテン等で舎内を閉め切ることが多くなりアンモニアガスが溜まりやすくなります。換気扇等の活用によりこまめに換気をしましょう。

幼畜の寝床は常に清潔な状態に保ち、風が直接体に当たらないようコンパネ等で風を防ぐとともに、コルツヒーター等の保温器具を活用し、防寒対策をしましょう。

◆飼料作物

イタリアンライグラスやエンバクの生育期になります。来月から収穫作業等が始まるため、飼養管理に影響がでないよう計画的な作業に向けて収穫機械等の点検を行いましょう。

(藤井 まり)

特用作物

◆茶

1 春肥の施用

春肥は、一番茶を始め二・三番茶の収量及び品質向上のために重要な肥料です。

2月上旬頃から2、3回に分けて地域の基準に従って、畦間全面に幅広く散布します。施用後は根を傷めない程度に軽く混和します。樹勢の低下が見られるほ場では、春整枝後に液肥を3回程度散布すると樹勢の回復に効果があります。

2 春整枝の実施

春整枝の時期の目安は平均気温が10℃になった頃です。平坦地では2月下旬から、山間地では3月上～中旬頃に実施しますが、一番茶の摘採時期が集中するのを避けるため、品種の早晩生や地域の微気象等を考慮し整枝の時期を調整しましょう。その際は、整枝直後に急激な低温に当たらないよう天気予報に注意してください。

整枝の高さは、葉層を8cm以上確保した上で、最終摘採位置から3～5cm高い位置が目安ですが、秋整枝を実施した茶園では、一番茶となる芽にかからない高さで丁寧に整枝しましょう。

また、春整枝後は防霜対策が必要となります。防霜ファンやスプリンクラーの点検・整備を計画的に行うなど、万全な対策を期してください。

3 カンザワハダニの防除

防除適期は、ハダニが産卵を開始する気温10℃となる時期（2月下旬～3月上旬頃）です。

地域の暦に準じ、裾部や葉裏に薬液が十分にかかるように散布します。防除の前までに、春整枝と裾刈りを済ませておくことで防除効果が高まります。

(竹田 博文)

◆しいたけ

1 植菌と仮伏せ

植菌は、暖くなると害菌の繁殖も強力となるため、2～4月頃までには終わらせます。

仮伏せは植菌した種駒の乾燥を防ぎ、初期活着を促進する作業です。菌系の活着・伸長に必要な温度と湿度を保つ必要があります。本県では、地際から50～60cm以下の高さに横積みする方法が多く使われています。ほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等

で直射日光や風が当たらないように被覆し、上面は雨が良く通り、かつ日陰が出来るようにして保温・保湿を図ります。

2 寒子づくり

袋掛けやビニール被覆を行い、良質なしいたけの生産に努めます。

3 採取

発生したしいたけは、目標の品柄に応じて5～7分開きの時に日和子（ひよりこ）の状態で採取し、品質の向上に努めます。特にほだ木の表面を傷めないように、かつヒダに触れないよう丁寧に採取します。

採取後は速やかに乾燥し、湿気が入らないようにビニール袋などで密封し、出荷箱等に入れて冷暗所で貯蔵し、梅雨時期までの早期出荷を心がけます。

（田畑 美香）

関連情報

◆農作業安全

農業は他産業に比べて、傾斜地などの土地条件や天候に左右されやすいなど、厳しい条件下での作業が多く、事故が起こりやすい職業です。

このため、ほ場や作業場の危険箇所を把握し、地図や見取り図を作成してリスクを「見える化」するなどし、農作業事故防止に努めましょう。

◆農薬適正使用

農薬の使用に当たっては、散布前に必ず農薬ラベルに表示された適用作物、適用病害虫、濃度、量、時期、回数等の使用方法をしっかりと確認しましょう。

散布時には、河川等の周辺環境、隣接するほ場の作物、周辺住民、家畜等に害を与えないよう周囲への飛散・流出に注意しましょう。

農薬散布後に、散布履歴を記帳するとともに、使用した防除器具を十分に洗浄しましょう。

◆園芸ハウスの省エネ対策

ハウスの加温時期となりました。燃料価格の高騰が続いているため、燃料使用量の削減に努めましょう。

施設園芸省エネルギー生産管理チェックシートを活用することで、燃料使用量の10%程度の削減が期待できます。本格的に加温を開始する前に、ハウスや暖房機の保守点検をしっかりと行い、適正な温度管理に努めましょう。

また、国の施設園芸等燃料価格高騰対策事業の補填対象期間が10月から開始されていますので、加入者の皆様は、毎月の燃料購入実績を加入先に忘れずに提出しましょう

(農業普及技術課)

内容の詳細について

2月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害虫全般	—	<p>いずれの病害虫も、多発してからでは防除効果が劣るため、発生初期の防除を徹底します。また、薬剤抵抗性害虫及び耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避けます。</p> <p>多重・多層被覆にしているところでは、換気が悪く病害の発生が助長されるので注意が必要です。各種病害の罹病葉等は感染源になるため、直ちに除去し施設外に持ち出し処分します。</p>
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病	やや少 やや多 並 並	うどんこ病の発生が多くなっています。うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病害は高温、多湿条件下で発生しやすいため、適正な温度・水管理に努めます。
	黄化えそ病(MYSV) ミナミキイロアザミウマ	やや少 並	キュウリ黄化えそ病の発病株を確認した場合は直ちに抜き取り、適切に処分します。また、本病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底します。
	タバココナジラミ	多	タバココナジラミの発生が多くなっています。本虫は、キュウリ退緑黄化病を媒介するため、特に、改植する場合は、次作に持ち込まないように注意します。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後に蒸し込みを行います。
冬春ピーマン	斑点病※ うどんこ病	多 やや少	斑点病の発生が多くなっています。多湿条件で発生しやすいため、施設内の適正な温湿度管理、排水対策を徹底します。発病葉は感染源になるため、できるだけ適葉し、施設外へ持ち出し処分します。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ タバココナジラミ	並 多 やや多	<p>ヒラズハナアザミウマは、花の中に生息しているため、薬剤防除は、薬液が花の中までしっかり付着するように行います。多発時は複数回の連続防除が必要です。</p> <p>タバココナジラミは、今後、気温の上昇とともに飛来が多くなるため、低密度のうちに防除を徹底します。</p>
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病 すすかび病※	並 並 多	すすかび病の発生が多くなっています。過繁茂等により施設内の湿度が高くなると発病しやすくなるので、換気を行うとともに、施設内が高湿度にならないように管理を徹底します。いずれの病害も多発してからでは防除効果が劣るので、予防散布に重点をおきます。
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV) タバココナジラミ	並 多	タバココナジラミの発生が多くなっています。本虫は、今後、気温の上昇とともに飛来が多くなるため、低密度のうちに防除します。TYLCVの発病株は、必ず株全体を抜き取りビニル袋に入れて枯れるまで密閉するなどして、適切に処分します。
冬春いちご	うどんこ病	やや多	うどんこ病の発生が多くなっています。多発してからでは防除効果が劣るため予防散布に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除を徹底します。発病果など被害部は早めに取り除きます。
	ハダニ類 コナジラミ類 ヒラズハナアザミウマ	並 やや少 並	<p>ハダニ類は寄生数が増加してからの防除は難しくなるため、低密度のうちに防除を徹底します。</p> <p>ヒラズハナアザミウマは、花や果実に寄生し、食害により果実品質が低下するため、低密度での防除に努めます。</p>
<p>1) 「発生量」は、過去 10 年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) ※は病害虫発生予察注意報を発表中です。</p> <p>3) 病害虫防除肥料検査センターの HP アドレスは、QR コードより閲覧してください。</p>			